

## ネパール協力団体の概要

### ● HDCS

#### (団体概要)

HDCS (Human Development and Community Service) はネパール人による現地NGOで、病院運営のほか、障がい児のデイケア施設等を運営しています。本部はカトマンズ(震源からは約80km)にあり、チョウジャリ病院や震源地近くにあるラムジュン病院などを管轄しています。JOCSは、檜戸健次郎医師をワーカーとしてHDCSに派遣しました。現在は、看護学、公衆衛生、経営学、薬学、臨床検査を学ぶ7名の病院スタッフに奨学金を支給しています。

#### (被害状況)

HDCSの病院の建物も被害を受けており、政府が定めた安全基準をもはや満たしていません。今現在、病院は機能していますが、長期的には使用できず、今後再建する必要があります。

HDCSが活動を行っている地域でも、多くの家屋が被害を受け、再建が必要となっています。例えば、ダディン郡では50~95%の家屋に被害が出ており、その数は約6万件に上ります。また、マクワンプル郡のダダカルカ村も大きな被害を受けており、1,200件の家屋のうち、133件が完全に倒壊しています。加えて、250件が今後住み続けることが困難な状態となっています。

#### (支援活動計画)

HDCSではメディアで報じられず、支援が届いていない人たちに焦点を当てて支援を行っています。地域としてはラムジュン郡、バクタプール郡、ダディン郡、マクワンプル郡などです。

HDCSは悪路や険しい山道に阻まれながらも、支援が届いていない地域に看護師などの医療従事者からなる医療チームの派遣を進めています。加えて、支援物資(米、レンティル豆、油、塩、石鹼、洗濯石鹼、調理器具など)の配布も行っています。

現在、被災地で最も必要とされているものは、テントや簡易シェルターをつくるための防水布です。モンスーンの季節も近づいており、安全な避難場所を確保することが急務となっていますが、ネパール国内での急激な需要の高まりでテントや防水布の入手が非常に困難になっています。HDCSではその代用品として、被災者にブリキ板を配布しています。ブリキ板は簡易シェルターの作成に使用でき、将来家を再建する際には、建材として再利用できるという利点があります。

## ● LMN アナンダバン病院

### (団体概要)

LMN (The Leprosy Mission to Nepal) アナンダバン病院は、1957年に開院したネパールで最大のハンセン病治療病院です。ネパールの農村地域では、人々が迷信に惑わされ、ハンセン病患者に対していまだに根強い差別が残っています。病院では、ハンセン病治療だけでなく、コミュニティベースのリハビリテーションなど、社会復帰のための訓練を行ったり、一般患者を受け入れたり、差別をなくすために尽力しています。

JOCSは、これまでに宮崎伸子助産師と柏木真紀助産師をワーカーとして派遣しました。現在は、医学、看護学、理学療法を学ぶ3名の病院スタッフに奨学金を支給しています。

### (被害状況)

病院の患者と職員に地震による負傷者はいませんでした。病棟や職員用宿舎に地震による被害が出ています。地震発生直後は、余震が続くため全ての患者と職員は4日間屋外で過ごしました。

周辺地域から多くの負傷者がアナンダバン病院に応急処置を求めてやってきました。病院スタッフも最善をつくしており、ネパール軍や近くの警察署の警察官も支援を行っています。

病院の周辺地域では、清潔な水の不足、無秩序な排泄とごみの投棄、雨などの悪天候によって下痢症や胃けいれんに感染する人が増えています。今後腸チフスやコレラが発生し、蔓延することが懸念されています。

### (支援活動計画)

アナンダバン病院では、病院にくる負傷者の治療を行うほか、保健事務所やネパール軍と協力して、医療チームを山間部を含む被害の大きかった地域に派遣しています。また、病院周辺地域で家を失った被災者に救援物資(食料や調理器具など)の配布を行っています。これらの活動に加え、震災後のハンセン病患者のおかれている状況について情報収集を進めています。

## ● UMN : United Mission to Nepal

### (団体概要)

UMN (United Mission to Nepal) は、1954年に鳥類研究家ロバート・フレミング博士が医師である夫人、ダグラス・カール・フレドリックス医師によって「Health」をミッションのキーワードとして設立されました。JOCSではこれまでにワーカーとして上田喜子看護師、川島淳子看護師、岩村昇医師、伊藤聡美医師、伊藤邦幸医師、俵友恵助産師・看護教師、石田武医師、桜井正恵栄養士、前田迪代保健師、木村雄二医師、安田敏明医師、北方一成医師をUMN管轄下の医療施設に派遣しました。現在では、医用画像工学、看護学、薬学を学ぶ3名に奨学金を支給しています。

### (被害状況)

タンセンとオカルドゥンガにあるUMNの病院に大きな被害はなく、職員も全員無事でした。震災後、オカルドゥンガの病院は周辺地域から16人の負傷者を受け入れました。タンセン病院でも患者の受け入れを行っています。

### (支援活動計画)

タンセン病院の2名の医師が、最も被害の大きかった地域のひとつであるゴルカ郡での医療キャンプの活動に参加しています。

タンセンとオカルドゥンガの病院では負傷した住民の治療を行っています。病院では、運ばれてくる患者の治療にあたっていますが、治療費を支払うことのできない患者に対しては、病院が費用を負担する必要があります。

負傷者の中には骨折箇所を内部から固定するための手術や皮膚移植などの高額な治療を必要としている人もおり、そのためには3万ネパールルピーから10万ネパールルピー（日本円で約3万6,000円～12万円）の費用が必要です。

病院では、300ドルで1人の軽傷患者の治療ができ、1,000ドルで1人の重傷患者の治療が可能になります。また輸血用の血液を集めるための費用（HIVや肝炎検査も含む）も必要となっています。

UMNは、洪水で大きな影響を受けたコシ地区での活動経験を通し、災害後のトラウマカウンセリングにおいて非常に多くの専門的知識と経験を有しています。この経験を活かし、今後ダディン郡やカトマンズなどで心理社会カウンセリングを行うことを計画しています。